高校生の社会参加の実態と活動経験別にみた支援方策の検討

――栃木県総合教育センター「地域課題に関する調査研究」の高校生サンプルに着目して――

An Actual Condition of Participating in Social Activities
and a Consideration of Supports Based on Activity Experience
—Focus on the Date of Highschool Students in the Investigation of Tochigi Pref—

石井　大一朗[1]・小柳　真一[2]・木津　英美里[3]
ISHII Daiichiro, KOYANAGI Shinichi, KIZU Emiri

[1]宇都宮大学地域デザイン科学部准教授
[2]栃木県総合教育センター生涯学習部
[3]栃木銀行

宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要『地域デザイン科学』第８号

高校生の社会参加の実態と活動経験別にみた支援方策の検討
――栃木県総合教育センター「地域課題に関する調査研究」の高校生サンプルに着目して――

An Actual Condition of Participating in Social Activities
and a Consideration of Supports Based on Activity Experience
—Focus on the Date of Highschool Students in the Investigation of Tochigi Pref—

石井　大一朗[1]・小柳　真一[2]・木津　英美里[3]
ISHII Daiichiro, KOYANAGI Shinichi, KIZU Emiri

高校生がボランティア活動や地域活動へ参加を進めることは、自らが他者との連携・協働を通して自己・他者・社会の理解を深めるなど、主権者教育やシチズンシップ教育に効果を生むことが 2016 年 6 月「主権者教育の推進に関する検討チーム最終まとめ」などで示されている。本研究は、2013 年に「地域づくり」に関する学びの場の充実を図るために行われた高校生を含む県民を対象とした「地域課題に関する意識・行動調査」「地域課題の解決に関する取組状況等調査」を継承する調査として、2019 年に栃木県総合教育センターと宇都宮大学石井研究室が共同研究として行なった結果の一部である。調査の結果、学習機会の提供が十分だと感じている人、学校で生徒会や家庭クラブなどの活動をしている人、地域課題の認識において高齢者支援等を自覚している人の方が、そうでない人に比べてボランティア活動等の活動経験が高くなることなどが示された。また、既に活動経験のある人とそうでない人で関心のある活動に、取り組みたい活動に大きな差があり、特に、集う場所や遊ぶ場所づくりに関する活動のように、高校生に直接的な利益につながる活動については、活動経験者の中に否定的な人がおり、コーディネートする際に留意する必要があることが明らかとなった。

キーワード：栃木県、高校生、地域活動、ボランティア活動、活動経験

1. 研究の背景と目的

本研究は、若者の社会参加、なかでも高校生に着目している。若者や高校生の社会参加が具体的に推進されるようになったのは「シチズンシップ教育の推進」や「意見表明機会の確保」の重要性を明確に掲げた、2009 年に施行された子ども・若者育成支援推進法とその推進方策として発表された 2010 年の子ども若者ビジョンからである。このビジョンにおいて重要な視点として示されたのが“高校生が育成される対象ではなく、社会の一員として自立し、権利と義務の行使により、社会に積極的に関わろうとする態度”を若者自らが獲得することを支えるという点である。それまでの青少

1　宇都宮大学地域デザイン科学部准教授　ish@cc.utsunomiya-u.ac.jp
2　栃木県総合教育センター生涯学習部　t-koyanagis01@pref.tochigi.lg.jp
3　栃木銀行　k222drum.All@gmail.com

年健全育成とは異なる画期的なものであった[1]。また、この法律とビジョンは、もともとは2001年の欧州若者白書がベースになったとされている[2]。そこでは、政策形成における若者の参画が重要な柱として位置付けられている。子ども若者ビジョンでは、それまで“育成の対象としての子ども・若者”という見方ではなく、社会構成する重要な主体として捉えることがビジョン検討にあたって第一の視点だったことが示されている。そして、ビジョンが掲げる5つの理念[3]のうちの一つ「自己を確立し社会の能動的形成者となるための支援」として、社会形成・社会参加に関する教育を推進するとしている。このように高校生の社会参加は、与えられる社会で過ごす私ではなく、暮らしやすい社会自体を自らがつくり出す力を養うために必要不可欠な機会と捉えることができよう。

以上のことから、本研究は、若者が参画する社会の実現に向けて、高校生の社会参加の機会が一層重要になっているという認識のもと、参加に向けて学校や地域のコーディネーションはどのように行えばよいのかを明らかにするための基礎資料を提供することを目的としている。そのために、学校が行う強制的な教育プログラムではなく、高校生が行う自発的なボランティア活動や地域活動を対象として、「どのような属性をもつ高校生が活動に参加しやすいのか」「どのような内容の活動に関心をもつのか」を明らかにする。これにより、学校教育の現場においてコーディネーションする立場にある教員や、活動するフィールドを用意する地域のキーパーソンらに有効な知見を提供することができると考える。

本研究は、2013年に「地域づくり」に関する学びの場の充実を図るために行われた高校生を含む県民を対象とした「地域課題に関する意識・行動調査」「地域課題の解決に関する取組状況等調査」を継承する調査として、2019 年に栃木県総合教育センターと宇都宮大学石井研究室が共同研究として行なったものであり、高校生に関する調査データを分析した結果の一部である。

2. 先行研究の検討

高校生のボランティア活動や地域活動に関する研究は数多く行われている。これらは、教育教材の開発、学校と地域の連携を推進する活動やその方法論といった学校教育の観点から研究するもの、具体的な活動に高校生が関わることの意義や、課題解決への貢献を分析するシチズンシップ教育やボランティア学に関する研究、ボランティアへの参加動機を探る心理学的観点から研究するものなどである。本研究では、特に高校生の主権者教育やシチズンシップ教育、さらには最近ではキャリヤ教育において、ボランティアや地域活動への参加が重要である[4]との認識をもち、高校生の参加要因や参加のバリア、さらには支援方法を探ることが目的である。参加要因に関して近年数多く報告する山本（2018）は、ボランティアへの参加動機を、誰かのためになりたい他者志向動機、自分自身の役に立つ自己志向動機、そして相手から頼まれて行う要請動機の3つに分けて、動機の違いにより活動の満足感や従事期間が異なる点に着目している。そして、これらの動機の違いによるボラ

ンティア体験がその後の活動意欲に違いを生みだすこと、さらに、山本（2014）では、その事前・事後の援助学習がボランティアの継続参加において重要であることを明らかにしている[5]。また、林（2010）は北海道・東北、関東のように地域ごとのボランティアの参加状況を、学校における単位認定や総合の時間としての取組などのカリキュラムとの関係から整理している。しかしながら、高校生に着目し、動機ではなく活動の種類による参加意識の相違や、特定の地域に着目し総括的な調査をした研究は見当たらない。他方、高校生に限定しなければ、特にまちづくりの分野において中道（1997）が大阪府吹田市の住民に対して行った市民意識の類型化をもとに地域活動への参加の要件を探る研究、桜井（2016）による地域への愛着と活動への参加の度合いを明らかにする研究がある。

本研究は、こうしたまちづくり分野や住民参加の知見を参考にしつつ、栃木県の高校生のボランティア活動や地域活動の参加の状況を総合的に把握するものである。そして、すべての高校生がボランティア活動や地域活動を経験することを前提にしたときに、どのような内容の活動が参加しやすいのか、どのような属性を持つ高校生が参加しやすいのかを把握することで、学校のボランティア教育や地域と連携したボランティアプログラムの開発に有用な知見を導き出すことができると考えられる。なお、本研究は高校生の自発的な活動に着目しているため、学校教育のプログラムではなく、学校以外での活動状況を把握している点にも特徴がある。

3. 調査の概要

本調査は、2013 年 3 月に、栃木県が、「地域づくり」に関する学びの場の充実を図るために、市町と県、高等教育機関、生涯学習施設等の関係者によるプロジェクトチームを立ち上げ、地域課題に関する学習の現状等について調査、分析をしたものの継続調査である。また、調査は高校生だけではなく、県民、教員、教育委員会職員、社会福祉協議会や中間支援センターの職員に対しても行っている[6]。本研究では、高校生データを対象に分析するものである。

3-1. 調査の概要

調査の概要は表 1 の通りである。本調査は、栃木県内のすべての高校を対象として実施した。

以下の表 2 に「性別」「課程・学科別」「地区別」「通学地・居住地別」の割合を示す。今回の調査では、全ての県立学校（高等学校、特別支援学校高等部〈付属中学校等は除く〉）の協力を得て、2,692 名からの回答が得られた。 地区別にみると、学校数の多い河内地区、下都賀地区の割合がともに全体の回答数に対して 20%を超えた。性別にみると、男女とも 48%前後とほぼ同数であった。

課程・学科別では、「全日制:普通・総合」は、普通科、普通系専門学科、総合学科に在籍する生徒を示す。「全日制:職業系専門」は、職業系専門学科に在籍する生徒を示す。全日制の普通科、総合学科に在籍する生徒が 57.5%と半数を超えた。 学校所在地と居住地では、「違う市町である」

が「同じ市町である」より 3.4 ポイント高かった。

表１　調査概要

調査対象者	栃木県立高等学校・特別支援学校高等部の生徒（各校一クラス40名程度） 計2,795名
配布・回収時期	2019年7月5日～19日
配布と回収の方法	教室において教員が配布し、回収。自記式解答
回収率	調査対象者数：2,795 名　回答者数：2,692 名　回答率：96.3 %
設問項目	地域課題の認識、取組状況、必要なサポート、取り組んでみたい活動、取り組んでいない人の理由、地域課題に関する学習機会の必要性や方法など、全13問である。
回答者の属性	今回の調査では、全ての県立学校から回答を得られた。男女比もほぼ同数であった。なお、学校所在地と居住地の関係は、「違う市町て゛ある」が「同し゛市町て゛ある」より 3.4 ホ゜イント高かった。
その他	本調査における「地域」とは、あなたか゛通学する学校付近と定義した。また、「地域課題」とは、 当該地域において、相対的に(周囲と比へ゛て)整備状況、達成度か゛不十分と考えられるものと定義した。

3-2. 分析枠組み

高校生のボランティア活動や地域活動への参加を検討するための分析枠組みは図１のようになる。高校生は活動の段階[7]に応じて、A 群：無関心者（活動経験は無く、かつ関心も無い）、B 群：関心者（活動経験は無いが関心がある）、C 群：既活動者（活動経験がある）、そして継続して活動する D 群：継続活動者に分けられる。これらをアンケート項目の 3 つの設問（図１中の問 6、11、12 参照）の集計結果から整理すると、それぞれ A 群が 30.2%、B 群 42.1%、C 群 27.8%となる[8]。活動者がより増えることを目標と考えれば、C 群の既活動者は活動を継続し（図１中の C’）、A 群・B 群の未活動者は、活動を経験する（図１中の B’）ために、それを促進するサポートが必要である。そのため、まず、①高校生全体の課題認識等の状況を把握する（4-1 節）。次に、②C 群の既活動者の特性を知るために、日頃の生活に着目し、地域課題に関する学習経験、学校生活（4-2 節）、①の課題認識などの違いが参加の有無にどの程度影響を与えているのかを把握する（図１中 X’）。そして、③具体的な支援策の検討のために、既活動者と未活動者の違いより、参加したい活動にどのような違いがあるのかを把握する（4-3 節）（図１中 B’C’）。

表２　対象者の属性

性別	人数	割合	居住と学校の所在	人数	割合
女性	1293	48.0%	同じ市町である	1261	46.8%
男性	1299	48.3%	違う市町である	1352	50.2%
無回答	100	3.7%	無回答	79	2.9%
合計	2692	100.0%	合計	2692	100.0%
学科・科	**人数**	**割合**	**学校のある地域**	**人数**	**割合**
全日制：普通・総合	1549	57.5%	河内（宇都宮市・上三川町）	636	23.6%
全日制：実技	705	26.2%	上都賀（鹿沼市・日光市）	295	11.0%
定時制：普通	86	3.2%	芳賀（真岡市・益子町・茂木町・市貝町・芳賀町）	258	9.6%
定時制：実技	98	3.6%	下都賀（小山市・栃木市・下野市・壬生町・野木町）	594	22.1%
通信制：普通	45	1.7%	塩谷南那須（矢板市・さくら市・那須烏山市・塩谷町・高根沢町・那珂川町）	250	9.3%
特別支援	209	7.8%	那須（大田原市・那須塩原市・那須町）	320	11.9%
合計	2692	100.0%	安足（足利市、佐野市）	339	12.6%
			合計	2692	100.0%

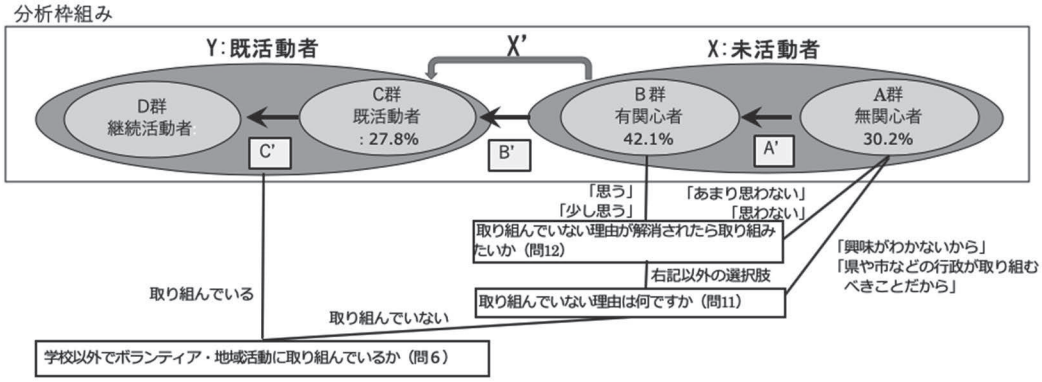

図１　分析枠組み　　栃木県総合教育センター（2020）をもとにＤ群を加え著者作図

4. 調査結果の概要

分析枠組みで整理した順に調査結果をまとめる。これにより高校生にどのような活動現場をコーディネートすればよいのか、またこれから新たに活動現場をつくりだしていく際にどのような内容の活動現場を用意すればよいのかを把握することができる。

4-1. 地域課題の認識状況

4-1-1. 認識される地域課題

学校付近や通学時における困りごとや地域の気がかりなこと（地域課題）を聞いた結果（複数回答可）、表２のようになった。全県でみると、「集う場所や遊ぶ場所がない」の回答が約半数で、回答割合が最も高い結果となった。次いで、「車や自転車の交通マナーが悪い」「商店街の活気がない」となり、これら３項目が、30%を超える回答割合となった。高校生の日常生活に関わる項目について、回答割合が高い傾向にある。

地区別による差異について、選択される上位項目に大きな違いは見られないが、全県で最上位である「集う場所や遊ぶ場所がない」は、河内を除く６地区で最上位となっている。河内地区で最上位となるなど、市街地を多く含む地区では「車や自転車の交通マナーが悪い」等の回答割合が高く、農村部を多く含む地区では、「集う場所や遊ぶ場所がない」「商店街の活気がない」「空き地や耕作放棄地が増えている」の回答割合が高かった。また、性別による差異をみると、５ポイント以上の開きがあるものを明確な差異と捉えた場合、「集う場所や遊ぶ場所がない」「勉強する場所がない」「登下校時に危険を感じる場所がある」の３項目で、いずれも女性が男性を約７ポイント上回った。

表３　認識する地域課題と関わってもよい活動（応答活動）

活動の内容	●認識する地域課題			●関わってもよい地域課題（応答活動）		
	人数	割合	順位	人数	割合	順位
集う場所や遊ぶ場所	1262	46.9%	1	991	36.8%	1
車や自転車の交通マナー	915	34.0%	2	740	27.5%	4
勉強する場所	523	19.4%	8	489	18.2%	5
登下校時に危険を感じる	805	29.9%	4	411	15.3%	7
豪雨や地震などの災害時対策	356	13.2%	11	251	9.3%	12
ゴミが落ちている、ゴミの分別	687	25.5%	5	909	33.8%	2
学校と住民との交流	232	8.6%	13	307	11.4%	9
外国人との交流	531	19.7%	7	371	13.8%	8
お祭りなどのイベントの盛り上がり	391	14.5%	9	804	29.9%	3
高齢者の安全確保や生きがいづくり	182	6.8%	15	145	5.4%	14
子どもの安全確保	227	8.4%	14	201	7.5%	13
観光名所や名産品がない	670	24.9%	6	284	10.5%	10
商店街の活気がない	885	32.9%	3	451	16.8%	6
空き家や耕作放棄地が増えている	381	14.2%	10	93	3.5%	16
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	179	6.6%	16	96	3.6%	15
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	295	11.0%	12	261	9.7%	11
その他	106	3.9%	17	24	0.9%	17
無回答	126	4.7%	_	194	7.2%	

4-1-2. 参加を促しやすい活動

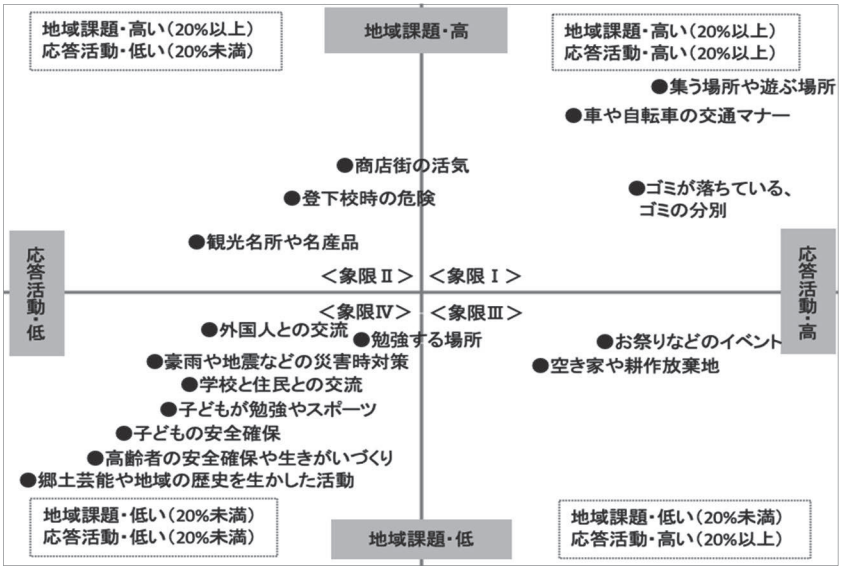

図２　認識する地域活動と応答活動の関係

次に、高校生が「今後関わってもよい地域課題」にどのようなものがあるのかについて把握し、そして、4-1-1.の認識する地域課題との関係から参加を促しやすい活動について検討する（表 3 の右側の列を参照）。選択される上位に大きな違いはないが、「勉強する場所」「お祭りやイベントなどの盛り上がり」が認識する地域課題に比べて順位を大きく上げている。「認識する地域課題」と「今後関わってもよい地域課題」の関係をここまでの分析結果から整理すると次のようなことが考えられる。今後関わってよい地域課題を、高校生が他者からの呼びかけに応答しやすい活動として［応答活動］と表し、検討を進める（図 2、両者の順位が高い活動は象限Ⅰに配置される。両者の順位が低い活動は象限Ⅳに配置される。両者の順位の差があるものは象限ⅡやⅢに配置される。象限Ⅰの活動は、既に地域活動して認識されており、かつ、関わってもよい活動、つまり積極的な参加を期待できる活動であり、コーディネートをしやすい活動と言えよう。象限ⅡやⅢは、両者の差が大きく、地域課題に関する学習の支援や関心を促す工夫が必要なものである。象限Ⅳは、地域課題の認識も関心も少ないことから、活動するに際しては十分な支援が必要である。

4-1-3. 地域課題を認識する人の類型

高校生の地域課題の認識を聞いた 4-1-1. の設問は、複数回答可能な設問であることから、どこに○をつけるのかは自由である。では、集う場所に○をつける人、車や自転車のマナーに○をつける人のように、回答のパターン、つまり、高校生の課題認識にどのような類型があるだろうか。18 の回答のうち「その他」「無回答」を除いた 16 の変数により、主成分分析を行いどのような回答パターンがあるのかについて整理する。

表 4　共通性と説明された分散の合計［地域課題の認識］

共通性			説明された分散の合計						
			成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	初期	抽出後		合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
集う場所や遊ぶ場所	1	0.563	1	2.836	17.726	17.726	2.836	17.726	17.726
車や自転車の交通マナー	1	0.457	2	1.537	9.605	27.331	1.537	9.605	27.331
勉強する場所	1	0.526	3	1.156	7.228	34.559	1.156	7.228	34.559
登下校時に危険	1	0.354	4	1.055	6.591	41.151	1.055	6.591	41.151
豪雨や地震などの災害時対策	1	0.262	5	0.968	6.048	47.198			
ゴミが落ちている、ゴミの分別	1	0.303	6	0.923	5.771	52.97			
学校と住民との交流	1	0.482	7	0.877	5.484	58.454			
外国人との交流	1	0.462	8	0.836	5.225	63.679			
お祭りなどのイベント	1	0.332	9	0.827	5.167	68.845			
高齢者の安全確保や生きがいづくり	1	0.360	10	0.806	5.037	73.882			
子どもの安全確保	1	0.400	11	0.750	4.686	78.569			
観光名所や名産品	1	0.454	12	0.735	4.592	83.161			
商店街の活気	1	0.555	13	0.706	4.410	87.571			
空き家や耕作放棄地	1	0.303	14	0.695	4.341	91.913			
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	1	0.403	15	0.654	4.089	96.001			
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	1	0.367	16	0.640	3.999	100.000			
因子抽出法: 主成分分析									

表５　成分行列表［地域課題の認識］

	成分			
	1	2	3	4
集う場所や遊ぶ場所	0.225	−0.460	0.549	0.003
車や自転車の交通マナー	0.322	0.458	0.263	−0.272
勉強する場所	0.241	−0.226	0.487	0.424
登下校時に危険	0.321	0.437	0.188	−0.155
豪雨や地震などの災害時対策	0.414	0.271	−0.035	0.126
ゴミが落ちている、ゴミの分別	0.313	0.441	−0.025	−0.098
学校と住民との交流	0.455	0.007	−0.313	0.421
外国人との交流	0.465	−0.166	−0.448	0.128
お祭りなどのイベント	0.450	−0.327	0.129	−0.078
高齢者の安全確保や生きがいづくり	0.524	0.215	−0.042	0.192
子どもの安全確保	0.478	0.355	0.213	0.013
観光名所や名産品	0.398	−0.374	−0.095	−0.383
商店街の活気	0.501	−0.351	−0.036	−0.424
空き家や耕作放棄地	0.484	0.021	−0.011	−0.261
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	0.518	−0.159	−0.327	0.047
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	0.458	−0.098	0.175	0.342
因子抽出法: 主成分分析				

主成分分析を行なった結果、固有値１以上の因子が４つ得られた（表４、５）。16 の変数が４つの主成分に集約されたことになる。表５は成分 1〜4 と元の変数との相関関係を示しており、それぞれの成分を中程度以上の正の相関に着目して解釈すると、地域課題の認識に次のような志向をもつグループが存在することが明らかとなった。

【主成分１：地域課題に幅広く関心をもつグループ】

この成分は、「高齢者の安全確保や生きがいづくり」「子どもの安全確保」「商店街の活気」「空き地や耕作放棄地」といった、自らの直接的な利益より社会課題に着目しており、また幅広く関心をもつ人たちである。

【主成分２：通学時などの身近な課題に関心をもつグループ】

この成分は、「車や自転車のマナー」「登下校時に危険」「ゴミが落ちている、ゴミの分別」といった毎日の生活上で気づく身近な課題に関心をもつ人たちである。一方で、主成分３で示すような自らや仲間との居場所については関心がない人たちである。

【主成分３：自らや仲間との居場所に関心をもつグループ】

この成分は、「集う場所や遊ぶ場所」「勉強する場所」にやや強い正の相関を示している。一方で、「外国人との交流」、「地域住民との交流」については負の相関を示している。こうしたことから自らや仲間と過ごす場所といった、直接的な利益につながる活動に関心がある人たちである。

【主成分４：学校と地域の交流に関心をもつグループ】

この成分は、「学校と住民との交流」「勉強する場所」にやや強く、そして「子どもが勉強やスポーツを教えてもらう場」に弱い相関を示す。他の成分にもみられた勉強する場所を除けば、地域と

の交流や地域からの支援に関心をもつ人たちと言えよう。

4-2. 活動経験者の特性

本節では、ボランティア活動や地域活動への参加がより一層進むために、“高校生の日頃の生活がどのような状況にあると、より活動しやすくなるのか”を把握するため、［取り組んだ経験がある］を従属変数とし、独立変数を今回の調査で聞いた、［学校や地域から学習する機会が十分に与えられている］、［学校活動におけるボランティア・地域活動の経験の種類］、［地域課題の認識の傾向（4-1-3 の分析から得られた 4 つの成分）］、そして［性別］、［同じ市町からの通学か否か］としたロジスティック回帰分析を行った。分析の結果、次のような状況にある人ほど活動に取り組みやすいことが明らかとなった。

表 6　ロジスティック回帰分析：日頃の生活が与える参加経験への影響

	回帰係数	オッズ比	
学習機会が十分に提供されていると感じている	0.29	1.337	*
学校活動におけるボランティア・地域活動の経験			
・各教科	0.019	1.019	
・総合的な学習の時間	-0.183	0.832	
・部活動	-0.089	0.915	
・ホームルーム活動	-0.061	0.941	
・生徒会・農業クラブ・家庭クラブ活動	0.54	1.715	**
・学校行事	0.087	1.091	
・その他	1.248	3.483	**
・取り組んでいない	-0.587	0.556	**
地域課題の認識			
・成分1-高齢者支援や空き地などの社会的な課題	0.25	1.284	**
・成分2-通学時の課題	0.113	1.119	*
・成分3-遊びや勉強の居場所	-0.021	0.979	
・成分4-住民との交流	-0.023	0.977	
性別：男性	-0.36	0.698	**
同じ市町に通学している	0.234	1.264	*

注1 モデル係数のオムニバス検定有意確率　0.000
注2　*＜0.05　**＜0.01

学校や地域での学習機会が十分に提供されていると感じている人は、そう感じていない人に比べて、ボランティアや地域活動への参加の割合が 30%以上高くなる（$p<0.05$）。学校活動におけるボランティアや地域活動の経験の内容については、「生徒会・農業クラブ・家庭クラブ」の経験をしている人は、そうでない人に比べ 1.7 倍以上、参加の割合が高くなる（$p<0.01$）。また「その他」の活動を経験している人は、そうでない人に比べて約 3.5 倍となる（$p<0.01$）。その他とは、記述欄を見ると保育ボランティア、陶器市などのイベントボランティア、福祉施設など施設ボランティアであった。そして学校内で取り組んだことのない人は、取り組んだことのある人に比べ、学校外での活動参加経験が約 45%低くなる（$p<0.01$）。次に 4-1-3.で得られた地域課題の認識の傾向を示す 4 つの成分については、主成分 1 は、そうでない人に比べて参加の割合が約 30%高くなり（$p<0.01$）、

主成分 2 は、そうでない人に比べて約 12%高くなる（$p<0.05$）ことが示された。この他に男性は女性に比べて参加の割合が約 30%低くなり、同じ市町の学校に通う学生はそうでない学生に比べて約 26%高くなる（$p<0.01$）ことが示された。

4-3. 既に取り組んでいる人とそうでない人の欲求活動の相違

4-1. では、山本（2018）が示す、積極的とは言えない他者からの依頼や提案があれば関わってもよい活動、つまり要請動機にもとづく社会参加の可能性として「関わってもよい活動（応答活動）」と認識する地域課題との関係を整理した。本節では、高校生本人の自発性に着目した分析を行う。まず、既に活動経験のある人と経験のない人の割合を求め、その上で、これらの違いをもとに自らの意思で取り組んでみたい活動にどのような差異があるのかを把握する。これらを把握することで、経験の有無に応じた支援方策を検討するための基礎的な知見を得ることができる。

4-3-1. 既に取り組んでいる人とそうでない人の割合

次に、学校外において、ボランティア活動や地域活動に取り組んでいる人・取り組んでいない人の状況を確認する。取り組んでいる人は全体（N=2692）の 26.7%、取り組んでいない人は 72.4%、無回答 0.9%であった。栃木県内の 7 つの地域別（表 2 の「学校のある地域」を参照）にみると、取り組んでいる人の割合は、順に、芳賀地域（n=258）38.8%、上都賀地域（n=295）30.5%、河内地域（n=180）28.3%、下都賀地域（n=594）24.7%、安足地域（n=339）23.6%、塩谷南那須地域（n=250）23.3%、那須地域（n=320）20%となった。芳賀地域の割合が特に高くなっている（芳賀、那須は $p<0.01$、その他は not significant）。

4-3-2. 活動してみたい内容の相違

高校生のボランティア活動や地域活動の支援者が、活動のコーディネートをしていく際に、既に活動に取り組んだ経験のある人とそうでない人の違いにより、どのような観点でコーディネートをするのかについて把握するために、活動の内容別に差があるのかを分析した（表 7）。既に活動に取り組んだ経験のある人［既活動者］、まだ取り組んだ経験のない人［未活動者］に分けて、どのような活動であれば取り組んでみたいかについて整理した（上位 5 位までは網掛け）。［既活動者］は、「お祭りなどのイベントの盛り上がり」に関心を持つ人が約半数おり、際立った結果となっている。また［未活動者］は、「集う場所や遊ぶ場所」「ゴミが落ちている、ゴミの分別」といった身近な問題に関心を持つ人が多くいることが示された。また、「お祭りなどのイベントの盛り上がり」に関心をもつ人も約 3 人に 1 人おり、「既活動者」の関心と共通しており、経験の有無に関係なく取り組みやすい活動であることがわかる。

表７　経験の有無による欲求活動の違い

活動の内容	●取り組んでみたい活動			
	既・活動者 n=719		未・活動者 n=1948	
	割合	順位	割合	順位
集う場所や遊ぶ場所	33.2%	3	33.7%	1
車や自転車の交通マナー	16.7%	7	12.8%	7
勉強する場所	18.9%	4	16.4%	4
登下校時に危険を感じる	11.4%	12	9.1%	10
豪雨や地震などの災害時対策	13.2%	9	7.3%	13
ゴミが落ちている、ゴミの分別	34.8%	2	27.8%	3
学校と住民との交流	13.1%	10	8.8%	11
外国人との交流	18.4%	5	13.8%	5
お祭りなどのイベントの盛り上がり	47.7%	1	31.7%	2
高齢者の安全確保や生きがいづくり	11.7%	11	7.1%	14
子どもの安全確保	11.0%	13	8.1%	12
観光名所や名産品がない	10.3%	14	9.7%	9
商店街の活気がない	13.8%	8	11.7%	8
空き家や耕作放棄地が増えている	5.6%	16	4.5%	16
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	9.0%	15	5.0%	15
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	18.2%	6	13.7%	6
その他	1.1%	17	0.6%	17
無回答	3.3%	–	5.1%	–
特になし　＊未経験者の設問のみ	–	–	16.7%	–

4-3-3. 既活動者・未活動者別の取り組みたい活動の類型

ここでは、既活動者と未活動者に分けて、取り組んでみたい活動の回答のパターンを把握する。これにより、既活動者と未活動者といった差異だけでなく、既活動者はどのような活動に取り組みたいのか、未活動者の人はどうかといった傾向を把握することができる。なお、ここでは取り組みたい活動を、4-1-2. の［応答活動］との違いに着目し、積極性を示す［欲求活動］と呼び、検討を進める。

（1）既活動者の［欲求活動］の類型

18 の回答のうち「その他」「無回答」を除いた 16 の変数により、主成分分析を行いどのような回答パターンがあるのかについて整理する。分析の結果、固有値 1 以上の因子が 3 つ得られた（表 8、9）。16 の変数が 3 つの主成分に集約されたことになる。表 9 は成分 1〜3 と元の変数との相関関係を示しており、それぞれの成分を中程度以上の正の相関に着目して解釈すると、次のような志向をもつグループが存在することが明らかとなった。

表 8　共通性と説明された分散の合計［既活動者の活動欲求の類型］

共通性

	初期	因子抽出後
集う場所や遊ぶ場所	1	0.587
車や自転車の交通マナー	1	0.628
勉強する場所	1	0.648
登下校時に危険	1	0.58
豪雨や地震などの災害時対策	1	0.318
ゴミが落ちている、ゴミの分別	1	0.448
学校と住民との交流	1	0.33
外国人との交流	1	0.27
お祭りなどのイベント	1	0.452
高齢者の安全確保や生きがいづくり	1	0.343
子どもの安全確保	1	0.343
観光名所や名産品	1	0.46
商店街の活気	1	0.352
空き家や耕作放棄地	1	0.163
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	1	0.279
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	1	0.376

因子抽出法: 主成分分析

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	3.993	24.955	24.955	3.993	24.955	24.955
2	1.39	8.687	33.643	1.39	8.687	33.643
3	1.193	7.455	41.098	1.193	7.455	41.098
4	0.998	6.239	47.337			
5	0.938	5.86	53.197			
6	0.869	5.43	58.627			
7	0.82	5.128	63.754			
8	0.787	4.917	68.672			
9	0.765	4.783	73.455			
10	0.727	4.541	77.996			
11	0.698	4.365	82.361			
12	0.635	3.969	86.33			
13	0.608	3.8	90.131			
14	0.576	3.6	93.731			
15	0.523	3.271	97.002			
16	0.48	2.998	100			

表 9　成分行列［既活動者の活動欲求の類型］

成分行列a

	成分		
	1	2	3
集う場所や遊ぶ場所	0.540	−0.065	−0.540
車や自転車の交通マナー	0.496	−0.609	0.106
勉強する場所	0.435	−0.197	−0.647
登下校時に危険	0.460	−0.605	0.053
豪雨や地震などの災害時対策	0.501	−0.147	0.213
ゴミが落ちている、ゴミの分別	0.601	−0.126	0.264
学校と住民との交流	0.464	0.152	0.303
外国人との交流	0.499	0.141	−0.020
お祭りなどのイベント	0.621	0.221	−0.130
高齢者の安全確保や生きがいづくり	0.488	0.091	0.312
子どもの安全確保	0.510	−0.157	0.242
観光名所や名産品	0.451	0.507	0.011
商店街の活気	0.502	0.308	−0.071
空き家や耕作放棄地	0.388	0.112	0.019
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	0.436	0.259	0.148
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	0.547	0.125	−0.248

因子抽出法: 主成分分析

【主成分１：なんでも活動したいグループ】

すべての内容に関して、中程度以上の強い相関を示している。幅広い関心があり、どのようなことでも取り組んでみたい人たちのグループである。ボランティア活動や地域活動において、リーダーシップを発揮しやすい人たちと考えられる。一方で、他の人たちとの積極性に関する温度差が大きいことが推察され、消極的な人たちとの連携・協力関係の支援が必要と考えられる。

【主成分２：観光や名産品に取り組みたいグループ】

観光や名産品に取り組みたい人たちであり、他の活動に関心を示さない人たちのグループである。特に登下校や、車・自転車のマナーといった日常の地域課題に強い負の相関がある。

【主成分３：自己利益に否定的なグループ】

集う場所や遊ぶ場所、勉強する場所といった自らの直接的な利益を求める活動に否定的な人たちである。

(2) 未活動者の［活動欲求］の類型

同様に主成分分析を行なった結果、固有値１以上の因子が４つ得られた（表 10、11）。16 の変数が 4 つの主成分に集約されたことになる。表 11 は成分 1〜4 と元の変数との相関関係を示しており、それぞれの成分を中程度以上の正の相関に着目して解釈すると、次のような志向をもつグループが存在することが明らかとなった。

【主成分１：人との関わり合いを中心に幅広く活動したいグループ】

高齢者や子供、地域住民など人との関わり合いに幅広く関心をもつグループである。また、それ以外の活動にも肯定的であることがうかがえる。

【主成分２：登下校時など身近な課題に関心をもつグループ】

車や自転車の交通マナー、登下校時の危険など身近な課題に関心をもつ人たちである。また、「既活動者」の成分に、この相関と全く逆の傾向を示すグループがいたことは注目に値する。

【主成分３：特に関心をもたないグループ】

未活動者には、今後も取り組んでみたいと思わない人たちが一定数存在する。またこの人たちは、集う場所や遊ぶ場所などの直接的な自己利益につながる活動にやや強い負の相関を示している。

【主成分４：商店街の活性化などまちの賑わいに関心をもつグループ】

商店街の活性化についてやや強い正の相関を示すグループである。

表 10 共通性と説明された分散の合計［未活動者の活動欲求の類型］

共通性			説明された分散の合計						
	初期	因子抽出後	成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
				合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
集う場所や遊ぶ場所	1	0.607	1	3.722	21.892	21.892	3.722	21.892	21.892
車や自転車の交通マナー	1	0.528	2	1.439	8.466	30.357	1.439	8.466	30.357
勉強する場所	1	0.398	3	1.29	7.585	37.943	1.29	7.585	37.943
登下校時に危険	1	0.532	4	1.046	6.152	44.094	1.046	6.152	44.094
豪雨や地震などの災害時対策	1	0.312	5	0.964	5.67	49.765			
ゴミが落ちている、ゴミの分別	1	0.421	6	0.895	5.267	55.031			
学校と住民との交流	1	0.39	7	0.886	5.214	60.246			
外国人との交流	1	0.275	8	0.824	4.846	65.092			
お祭りなどのイベント	1	0.464	9	0.797	4.687	69.78			
高齢者の安全確保や生きがいづくり	1	0.485	10	0.739	4.348	74.128			
子どもの安全確保	1	0.482	11	0.717	4.217	78.345			
観光名所や名産品	1	0.471	12	0.692	4.068	82.413			
商店街の活気	1	0.571	13	0.648	3.812	86.225			
空き家や耕作放棄地	1	0.331	14	0.641	3.772	89.997			
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	1	0.422	15	0.581	3.419	93.416			
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	1	0.43	16	0.567	3.334	96.75			
その他	1	0.377	17	0.553	3.25	100			

表 11 成分行列［未活動者の活動欲求の類型］

成分行列a				
	成分			
	1	2	3	4
集う場所や遊ぶ場所	0.397	−0.366	−0.555	0.092
車や自転車の交通マナー	0.420	0.475	−0.329	0.136
勉強する場所	0.394	−0.128	−0.460	0.121
登下校時に危険を感じる	0.452	0.484	−0.248	0.179
豪雨や地震などの災害時対策	0.455	0.276	0.056	0.159
ゴミが落ちている、ゴミの分別	0.453	0.365	−0.107	−0.266
学校と住民との交流	0.520	−0.138	0.235	−0.214
外国人との交流	0.444	−0.211	0.132	−0.126
お祭りなどのイベントの盛り上がり	0.493	−0.439	−0.101	−0.134
高齢者の安全確保や生きがいづくり	0.583	0.158	0.300	−0.173
子どもの安全確保	0.530	0.281	0.163	−0.311
観光名所や名産品がない	0.525	−0.206	0.278	0.276
商店街の活気がない	0.491	−0.271	0.051	0.503
空き家や耕作放棄地が増えている	0.445	0.223	0.150	0.247
郷土芸能や地域の歴史を生かした活動	0.495	−0.171	0.325	0.204
子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場	0.479	−0.210	0.031	−0.394
特にない	−0.310	0.143	0.422	0.287
因子抽出法: 主成分分析				

本節の分析結果から、既活動者が取り組みたいと考える活動群と、未活動者が取り組みたいと考える活動群が明らかとなった。また両者は取り組みたい活動が大きく異なることもわかった。これは経験の有無による活動のコーディネートにおいて留意する点を示すものである。特に、車や自転車の交通マナー、登下校時の危険、集う場所や遊ぶ場所、勉強する場所のような高校生の生活や直接的な利益につながる活動では、関心の大きく異なる人たちが存在することがわかった。

5. まとめと考察

以上の分析結果から明らかとなった点を整理すると次のようになる。高校生の社会参加、なかでもボランティア活動や地域活動への参加の促進において、活動内容の違いによって参加のしやすさに違いがある。他方、高校生が学校や普段の生活を通して把握している地域課題と、取り組んでもよい活動とは一致していないことが多い。例えば 4-1-2.で示した「郷土芸能や地域の歴史を生かした活動」は、学校において学習時間を設けることが少なくないが、地域課題としての認識や取り組んでみたい活動かについては、回答する人の数はともに非常に低く、丁寧なコーディネートが必要であることがわかる。これは山本（2018）が示しているように強制的な参加、つまり要請動機はその後の継続的な参加とならないために留意すべき重要なポイントである。また、学校外で既に活動を経験している人の割合が 3 割弱と少なくないことがわかり、参加にやや強い正の影響を与える因子として、「学習経験が十分と感じている」といった学校内での授業や、「生徒会・農業クラブ・家庭クラブ活動」といった学校内での活動経験が学校外での活動経験に影響することがわかった。逆に、学内で活動をしていない人や男性は、参加の割合が低くなる。学内でなんらかの活動に関わる機会を設けることや、関心の低い男性については十分なサポートを行う必要がある。そして、3-2.

分析枠組みで示したように、既活動者と未活動者といった活動経験の差による欲求活動の違いに着目した分析結果から、経験の有無により欲求活動に大きな差があり、特に既活動者のなかには、自己利益や通学時等の自らの日常的な課題に否定的な人たちが一定数いることが認められた。こうした活動をコーディネートする際には、身近な課題と社会的な課題のつながりを学習する機会を設けるなどの工夫が必要だろう。

本研究は、高校生の学校外におけるボランティア活動や地域活動への参加の促進に向けた支援策、特に高校生の参加を直接支援する教員や活動を現場で受け止める地域のキーパーソン、そして支援機関担当者の視点からコーディネートする際に必要な知見を導き出すものであった。特に、課題認識の傾向と取り組みたい活動の違い、活動経験の有無と取り組みたい活動の違いが明らかとなった。今後の研究課題としては、分析枠組みで示したC'やB'をより進めるために、それを妨げるバリアの把握、さらに本アンケート調査では実施していないが、既に活動者している人が継続した活動をしたりリーダー層として活躍したりしていくための要点を分析していく必要がある。これにより、高校生の欲求活動（自らが取り組みたい活動の内容）に着目した、参加意識の醸成、参加のバリアの軽減、継続参加やリーダー層の創出といった、教育者や支援者に求められるコーディネート力を高めていくことができると考えられる。

参考文献

1　経済産業省（2006）「シチズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」、URL http://www.AkAruisenkyo.or.jp/wp/wp-content/uploAds/2012/10/hokokusho.pdf 2020 年 5 月 2 日閲覧

2　桜井良（2016）・小堀洋美・中村雅子・菊池 貴大「住民のコミュニティへの関与度や愛着が緑化意欲に与える影響」『環境科学誌』29 号、pp.149-158

3　津富宏（2014）・両角達平「欧州委員会白書「欧州の若者のための新たな一押し」『国際関係・比較文化研究』、静岡県立大学国際関係学部、第 13 巻第 1 号、（原著 Commission of the EuropeAn Communities,2001. EuropeAn Commission White PAper:A New Impetus for EuropeAn Youth. Brussels,21th Nov. 2001 COM（2001） 681 finAl.）

4　中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」 2011 年 1 月 URL https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/Afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf 2020 年 5 月 2 日閲覧

5　栃木県総合教育センター（2020）「地域活動の参加促進に向けて～地域課題に関する調査研究～概要・総括編」、p24

6　中道 實 （1997）「主体要件の析出とその実態」、神谷国弘, 中道實編『都市的共同性の社会

学―コミュニティ形成の主体要件』ナカニシヤ出版、pp.133-152

7　林幸克（2010）「高等学校におけるボランティア活動の現状―地域差に着目した報告―」国立青少年教育振興機構研究紀要，第 10 号、　pp.137−146

8　文部科学省総合教育政策局地域学習推進課（2016）「主権者教育の推進に関する検討チーム最終まとめ」、URL https://www.mext.go.jp/A_menu/sports/ikusei/1372381.htm 2020 年 5 月 2 日閲覧

9　山本陽一・松井豊（2014）「中高生のボランティア動機～ボランティア活動の援助成果の探索的検討:感想文の内容分析を通して～」、筑波大学心理学研究 vol47、pp.37-45.

10　山本陽一（2018）「ボランティア体験が中学生と高校生のボランティア活動意欲に及ぼす影響」応用心理学研究 vol44, No1, pp.21-33

注

1　2009 年の子ども・若者育成支援推進法の以前は、中央教育審議会の 2007 年の答申において、青少年育成について、次の 5 つの課題が掲げられている。⑴家庭における生活習慣の定着や体力向上が重要であること、⑵すべての青少年が，その生活圏内で多様な体験ができる環境が整備されること、⑶保護者や教職員と共に地域の大人が，積極的に青少年とかかわること、⑷青少年一人一人の状況に応じて，ガイダンスの発想に応じた支援を行うこと、⑸情報メディアをめぐる問題について，大人の責任として対応すること、これらは支援される対象、保護される対象としての青少年像がベースにあり、子ども・若者育成支援推進法が重視する“高校生が育成される対象ではなく、社会の一員として自立し、権利と義務の行使により、社会に積極的に関わろうとする態度”を若者自らが獲得することを支えるという視点とは大きく異なっている。

2　2001 年に発表された欧州若者白書は、日本の子ども・若者育成支援推進法の整備において大きな影響を与えたとされている。訳書を発行した津富宏（2014）によると、本白書は、2000 年 5 月から 2001 年 3 月にかけて、若者と、国・欧州レベルのステークホルダー集めて実施した協議の成果物であり、社会への参加の方法を変革することを目的として、若者政策における EU 加盟国間の協同を加速化するとともに、個々の政策に若者の側面を考慮に入れるという新たな枠組みを提示したものとしている。また、白書は、当時の伝統社会の変容とグローバリゼーションの波の中にある欧州の若者を出発点とし、彼らをその政策の中の立役者すなわち「完全な市民」として位置づけ、彼らとともに議論を重ねて作り上げた若者政策の体系化を狙ったものであることを紹介している。

3　5 つの理念とは次の通りである。（1）子ども・若者の最善の利益を尊重、（2）　子ども・若者は、大人と共に生きるパートナー、（3）自己を確立し社会の能動的形成者となるための支援、

（4）子ども・若者一人一人の状況に応じた総合的な支援を、社会全体で重層的に実施、（5）大人社会の在り方の見直し、これら 5 つである。また、この「子ども・若者ビジョン」は、子ども・若者育成支援推進法（2009 年法律 第 71 号）の施行を受け、「青少年育成施策大綱」（2008 年 12 月）に代わるものとして作成された。 ビジョンの 1p には策定にあたって次のような視点が示されている。子ども・若者を育成の対象としてとらえるのではなく、社会を構成する重要な主体として尊重する。子ども・若者を中心に据え、専門家も交えた地域のネットワークの中で成長することを支援する。すべての子ども・若者の成長・発達を応援するとともに、困難を抱えている子ども・若者がその置かれている状況を克服することができるよう支援する。今を生きる子ども・若者を支えるとともに、将来をよりよく生きるための成長をサポートする。子ども・若者を取り巻く大人の役割は大変重要であり、大人の側でもよりよい社会づくりを積極的に行うことを求める。

4 主権者教育は、単に政治の仕組みについて必要な知識を習得させるにとどまらず、主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身に付けさせることを目的とした教育である（参照：文部科学省（2016 年）「主権者教育の推進に関する検討チーム最終まとめ」）。シチズンシップ教育は、成熟した市民社会が形成されていくために、市民一人一人が、社会の一員として、地域や社会での課題を見つけ、その解決やサービス提供にかかわることによって、急速に変革する社会の中でも、自分を守ると同時に他者との関係を築き、職に就いて豊かな生活を送り、個性を発揮し、自己実現を行い、さらによりよい社会づくりに参加・貢献するために必要な能力を身に付けさせることを目標にした教育のことである（参照：経済産業省（2006 年）「シチズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」）。キャリア教育は、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育のことである。（参照：中央教育審議会（2011 年）答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」） 。これらのいずれもおいて、重視されているのが、ボランティア活動や地域活動など現実社会における体験活動や探究活動を通した社会参画意識を高めることとなっている。

5 ボランティア体験後の援助成果がボランティア活動意欲を高めることなど次のような点が示された。 ボランティア体験後の援助成果は、“気持ちの達成感が生まれた”や、“やりがいが生まれた”といった項目の平均値が高かった。青少年が学校や地域でボランティア活動を体験する機会が増えていたが、体験する機会を増やすだけではなく，青少年が達成感ややりがいを感じられる活動が提供されることが重要と考えられる。ボランティア体験とともに、共感や動機を高めるための事前学習もボランティア体験後の援助成果を高めるうえで有効と考えられる。

6　調査の具体的な対象は以下の通りである。＜地域課題に関する意識・行動調査＞（1）県民対象調査：栃木県総合教育センターや栃木県内各教育事務所主催の講座、シルバー大学校等の学習機会に参加された方（栃木県内の各自治体の人口・性別・年代等を考慮）計 2,006 名（2）高校生対象調査：栃木県立高等学校・特別支援学校高等部の生徒（各校 40 名程度）計 2,795 名　＜地域課題の解決に関する取組状況等調査＞（1）高等学校・特別支援学校教員対象調査：栃木県立高等学校、特別支援学校高等部の教員（地域連携教員等各校 1 名）計 83 名（2）市町生涯学習、社会教育関係職員対象調査：市町教育委員会生涯学習、社会教育主管課職員（1-2 名）、市町公民館、図書館、博物館等の社会教育施設職員（各施設 1 名）計 289 名 ⑶ 社会福祉協議会・中間支援センター職員対象調査：県および市町の社会福祉協議会職員（1-2 名）、中間支援センター（市民活動支援センター）職員（各施設 2 名）計 98 名

7　活動参加の段階については、アドプト・プログラムなどにおいて整理されている参加の段階に応じた、市民や団体の育成支援の捉え方がある。アドプト・プログラムでは、市民を「無関心層」「関心はあるが活動していない層」「活動しているがリーダーではない層」「リーダー的存在層」の 4 タイプに分け、活動のサポートを行っている。なお、アダプト（ADOPT）とは英語で「〇〇を養子にする」の意味である。例えば、公共の場所や活動を養子にみたて、市民がわが子のように愛情をもって面倒を見ることである。現代の地域活動においては、こうした状況が促進されるよう市民と行政が互いの役割分担を定め、両者のパートナーシップのもとで公共を担うことを指す。1980 年代後半にアメリカやカナダ、ニュージーランドにおいて、環境美化活動の分野から発展した。

8　それぞれの割合の算出については、問 6、11、12 の無回答者 102 名を除く、2590 名を対象としている。A 群については、アンケート項目問 11（複数選択可）において、「興味がないから」「県や市などの行政が取り組むべきことだから」に〇を回答した人を、地域課題を自分ごととして捉えることが難しく自ら活動する意思がないと捉え、［無関心者］として抽出し、また〇をつけなかった人で問 12 において、取り組まない理由が解消されても取り組みたいと「思わない」「あまり思わない」に〇を回答した人を抽出し、それらを合計した人を無関心者として割合を算出している。B 群については、A 群を除いた人の割合である。C 群については、問 6 の取り組んでいる・過去に取り組んだことがある人の割合である。

参考資料：高校生向け質問紙　　以下のウェブサイトから、高校生向け、一般県民向けの質問紙を取得できる。

https://www.tochigi-edu.ed.jp/rainbow-net/multidatabases/multidatabase_contents/detail/82/2bbf817373d2d9ed7439632b6339a2c7?frame_id=26

2　高校生対象の地域課題に関する意識・行動調査アンケート調査票

地域課題に関する意識・行動調査　【生徒用】

調査協力のお願い

本調査は、県内高校生の地域課題に関する意識・行動の状況を把握し、今後の地域づくりに関する学びの場の充実に向けた基礎データとするものです。
本調査の目的を理解いただき、協力をお願いします。なお、本調査結果は統計的に処理し、皆様の回答を個別に公表することはありません。

栃木県総合教育センター　生涯学習部

問１　学校付近や通学時におけるあなたの困りごとや地域の気がかりなこと（地域課題）を教えてください。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　集う場所や遊ぶ場所がない
2　車や自転車の交通マナーが悪い
3　勉強する場所がない
4　登下校時に危険を感じる場所がある
5　豪雨や地震などの災害時対策が不安である
6　ゴミが落ちている、ゴミの分別ができていない
7　学校と住民との交流が不足している
8　外国人との交流がない
9　お祭りなどのイベントが盛り上がっていない
10　高齢者の安全確保や生きがいづくりが十分ではない
11　子どもの安全確保が不十分である
12　観光名所や名産品がない
13　商店街の活気がない
14　空き家や耕作放棄地が増えている
15　郷土芸能や地域の歴史を生かした活動を十分にできていない
16　子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場が少ない
17　その他〔　　〕

問２　問１の１～16中で、現状を改善するために、あなたが関わってもよいと思うものはどれですか。あてはまる番号３つに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　集う場所や遊ぶ場所がない
2　車や自転車の交通マナーが悪い
3　勉強する場所がない
4　登下校時に危険を感じる場所がある
5　豪雨や地震などの災害時対策が不安である
6　ゴミが落ちていたり、ゴミの分別ができていない
7　学校と住民との交流が不足している
8　外国人との交流がない
9　お祭りなどのイベントが盛り上がっていない
10　高齢者の安全確保や生きがいづくりが十分ではない
11　子どもの安全確保が不十分である
12　観光名所や名産品がない
13　商店街の活気がない
14　空き家や耕作放棄地が増えている
15　郷土芸能や地域の歴史を生かした活動を十分にできていない
16　子どもが勉強やスポーツを教えてもらえる場が少ない
17　その他〔　　〕

問３　あなたは、学校の活動で、ボランティアや地域の活動に取り組んでいますか。その場面について、あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　各教科
2　総合的な学習の時間
3　部活動
4　ホームルーム活動
5　生徒会・農業クラブ・家庭クラブ活動
6　学校行事
7　その他〔　　〕
8　取り組んでいない

次のページへお進みください

問４　学校での地域活動について、次の中でどのようなことを期待しますか。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　地域の特色や課題を知ることができる
2　地域の産業や文化への理解を深める
3　地域の多様な人々と交流できる
4　地域の企業・機関・上級学校とつながりをもてる
5　地域の仕組みを学ぶことができる
6　地域貢献の方法・技術を学ぶことができる
7　地域の課題の解決に貢献できる
8　地域の活性化に貢献できる
9　自分の進路意識が高まる
10　様々な体験活動ができる
11　自分の視野を広げる
12　自分を表現する力を養う
13　教科学習についてプラスなる
14　大学等の入学試験・就職試験を意識した活動ができる
15　授業で学んだことを実社会で役立てる場にできる
16　特にない
17　その他〔　　〕

問５　地域のことを知る・学習する機会は、学校や地域から十分に提供されていると感じますか。最もよくあてはまる番号１つに○をつけてください。

1　十分に提供されている
2　どちらかといえば提供されている
3　どちらかといえば提供されていない
4　まったく提供されていない

問６　あなたは、学校の活動以外で、ボランティアや地域（学校の所在地・自宅の所在地ともに含む）の活動に取り組んでいますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1　取り組んでいる（または、過去に取り組んだことがある）　→問７～問10・問14～
2　取り組んでいない　→問11～

【問６で１に回答された方は、問７～10にお答えください。その後、問14にお進みください。】

問７　問６で「取り組んでいる（または、過去に取り組んだことがある）」と回答された方に伺います。それは具体的にどのような活動ですか。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　防災（減災）・防犯（地域での防災訓練、防災マップの作成 等）
2　子どもの安全確保（登下校の見守り、安全・安心な子どもの居場所づくり 等）
3　家庭教育支援・子育て支援（児童館・保育園のボランティア 等）
4　青少年の健全育成（体験活動、主権者としての学習 等）
5　郷土芸能の伝承（神楽・民話の伝承、お祭り・伝統行事への参加 等）
6　子ども会・JLC・地域活動団体等の運営（まちづくり・ボランティア団体等の活動への参加 等）
7　住民同士の交流（地域の運動会や文化祭への参加 等）
8　高齢化（安全確保、福祉施設への慰問 等）
9　地域ブランド（観光の活性化、名産品をつくる 等）
10　国際化（国際交流イベントへの参加、日本語教室への支援 等）
11　過疎化・人口減少（空き家や耕作放棄地の活用 等）
12　環境保護・美化（道路・河川の清掃、花いっぱい運動 等）
13　人権問題（差別の撤廃、社会を明るくする運動 等）
14　市街中心部の空洞化（商店街の活性化、地域情報誌の発行 等）
15　交通マナー（街頭での啓発活動 等）
16　小中学生への学習指導・スポーツ指導（小中学生での 等）
17　その他〔　　〕

問８　問６で「取り組んでいる（または、過去に取り組んだことがある）」と回答された方に伺います。活動にはどのような立場で取り組んでいます（いました）か。最もよくあてはまる番号１つに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　個人として
2　地域の団体のリーダーとして
3　地域の団体のメンバーとして
4　その他〔　　〕

問９　問６で「取り組んでいる（または、過去に取り組んだことがある）」と回答された方に伺います。
どのような手助けがあると、さらに活動に取り組みやすくなると思いますか。あてはまる番号３つ以内に○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　地域活動に関する相談ができる機会の提供、機関の紹介
2　メンバー募集を行っている地域団体の情報提供
3　地域活動を行っている団体の紹介
4　実際に地域活動ができる場所の紹介
5　地域活動をするときに必要となるアドバイスを得る機会や学習の機会
6　同じような活動をしている人や団体同士の交流の機会
7　地域活動の資金や必要な物品の支援
8　その他〔　　〕

問 10　問６で「取り組んでいる（または、過去に取り組んだことがある）」と回答された方に伺います。
今後、どのような活動に取り組んでみたいですか。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　集う場所や遊ぶ場所づくり
2　車や自転車の交通マナーの改善
3　勉強する場所づくり
4　登下校時に危険を感じる場所の点検
5　豪雨や地震などの災害時の対策を学ぶ活動
6　ゴミ拾いやゴミの分別などの環境美化活動
7　学校と住民との交流活動
8　外国人との交流
9　お祭りなどのイベントを盛り上げる活動
10　高齢者の安全確保や生きがいづくりの支援
11　子どもの安全確保の支援
12　観光の活性化や名産品をつくる活動
13　商店街の活性化
14　空き家や耕作放棄地の活用や管理
15　郷土芸能や地域の歴史を生かした活動
16　子どもの居場所づくり、学習・スポーツ支援
17　その他〔　　〕

【問６で２に回答された方は、問 11～13 にお答えください。その後、問 14 にお進みください。】

問 11　問６で「取り組んでいない」と回答された方に伺います。
取り組んでいない理由は何ですか。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　学校の勉強や部活動が忙しいから
2　友人や家族など身近な人がやっていないから
3　１人だとやりたくないから
4　やりたい気持ちはあるが、活動に誘われるなどのきっかけがないから
5　アイディアや人間関係など自信がないから
6　そもそもそういう活動があることを知らなかったから
7　既に活動している個人や団体があり、自分が取り組む必要性を感じないから
8　県や市など行政が取り組むべきことだから
9　興味がわかないから
10　その他〔　　〕

次のページへ
お進みください

問 12　問６で「取り組んでいない」と回答された方に伺います。
問 11 の理由が解消されたら、活動に取り組みたいと思いますか。最もよくあてはまる番号１つに○をつけてください。

1　思う　　2　少し思う　　3　あまり思わない　　4　思わない

問 13　問６で「取り組んでいない」と回答された方に伺います。
どのような活動であれば、取り組んでみたいですか。あてはまる番号全てに○をつけてください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。その他を選択した場合には、〔　〕内にお書きください。

1　集う場所や遊ぶ場所づくり
2　車や自転車の交通マナーの改善
3　勉強する場所づくり
4　登下校時に危険を感じる場所の点検
5　豪雨や地震などの災害時の対策を学ぶ活動
6　ゴミ拾いやゴミの分別などの環境美化活動
7　学校と住民との交流活動
8　外国人との交流
9　お祭りなどのイベントを盛り上げる活動
10　高齢者の安全確保や生きがいづくりの支援
11　子どもの安全確保の支援
12　観光の活性化や名産品をつくる活動
13　商店街の活性化
14　空き家や耕作放棄地の活用や管理
15　郷土芸能や地域の歴史を生かした活動
16　子どもの居場所づくり、学習・スポーツ支援
17　特にない
18　その他〔　　〕

《次の設問からは、全員お答えください。》

問 14　その他、地域を学ぶことやボランティア・地域の活動について、自由にお書きください。

《次の設問からは、あなた自身のことについてお聞きします。》

問 15　差し支えなければ回答してください。
あなたの性別について、あてはまる番号に○をつけてください。

1　女　　2　男

問 16　あなたの通学する学校のある市町と、あなたがお住まいの市町は、同じですか。あてはまる番号に○をつけてください。

1　同じ市町である　　2　違う市町である

以上で設問は終わりです。御協力ありがとうございました。